
登場人物紹介

| | |
|-----------|-----------------------------|
| リズ・バートン | 新進の女流作家 |
| ジョシュア・ワット | リズの遠戚にあたる元レンジャーの傭兵 |
| ジェイク・バートン | リズの実兄 |
| ベラ・バートン | ジェイクの妻 |
| ジュヌヴィエーヴ | 生まれたばかりの、ジェイクとベラの娘 |
| ホットワイヤー | 元レンジャーの傭兵。 コンピュータのエキスパート |
| ニトロ | 元レンジャーの傭兵。爆発物の専門家 |
| ジョシー・マコール | ニトロとコンビを組む女性エージェント |
| マイク | リズの離婚した元夫 |
| メロディ | ジョシュアの離婚した元妻 |
| ネメシス | リズを付け狙う謎のストーカー |

壁に衝突することならよくあるが、車の行きかう道路に転げ落ちるとなると、話はまるつきりちがう。

だから、リズは身を飛ばって冷たいコンクリートの地面に手を突く直前、つんのめるほど強く肩甲骨のあいだを押されたのは気のせいではないとわかった。ブレーキをかけた車のタイヤがさしる音や、うしろであがった女性の甲高い悲鳴と同じく。

リズは道路から体を起こして膝を突いた。誰かに緑石まで引き戻されると、そのまま体は流されたが、壁のような人の波にあらがった。

「ぼさっとするなよ」無愛想な低い声が出た。

頭から爪先までシーホークス(シアトルに本拠地を置くプロ・Aメリカンフットボール・チーム)のチームカラーのグリーンとブルーに身を包んだ女が言った。「試合の終わったあとは気をつけないとだめよ——歩道も車道もこった返してるんだから」

リズは十一月の凍てつく空気をなんとか肺に吸いこみ、息もたえだえに言った。「押され

うしろに誰がいるのか見ようと振り返りかけ、またはや縁石から足を踏みはずしそうになった。「誰かに押されたのよ」とリズは声を張りあげてくり返した。「誰がやったか、見た人はいませんか？」

「あんだ、なにを言いだすつもりだ？」と年寄りの男が信じられないという顔で言った。

「あたしはなにも見なかったけど」と赤いパーカーの女が言った。

黒人の中年女性がリズの肩を軽く叩いた。「勘ちがいだったんじゃない？」

「たぶん頭が混乱してるんだろ」その黒人女性に連れが言った。

さまざまな声の不協和音のように頭に響いたが、リズにはひとつだけはっきりしていることがあった。

誰も彼を見ていない。

またしても。

信号が変わり、歩行者の波がリズをよけるようにして道路に流れこんだ。

彼女はまわりの反応に動揺してその場に立ちすくみながらも、目だけは通りすぎる人の群れを追っていた。敵意のある目を向けてくる者はいない。あやうく車にはねられそうになつた女を不自然なほどじろじろ見る者もない。犯人が誰なのか、ヒントになりそうなことはなにひとつなかった。歩道の縁からわたしを突き飛ばした男は誰なのか。

。というか、あれは男だったのだろうか？。リズはそれさえもわからず、わからないということになによりも恐怖心をかき立てられた。

どこで敵を探せばいいのか、どうやって見分ければいいのか、手がかりはまったくない。それでもここにいれば、生まれ故郷のテキサスの小さな町から何千キロも離れた、冷たい雨がそぼ降るシアトルにいれば安全だと、いまのいままで思っていた。

それはまちが이었다。

リズは差出人不明のEメールを見ているうちに、胃がむかむかしてきた。

この三日で三通め。何件かの迷惑電話と、ロックした車の運転席に血のように赤いバラが置かれていたことを考え合わせれば、恐怖で胸が悪くなっても無理はない。

ミス・バートン、楽しい感謝祭をキャニオン・ロックで過ごすことを願っている。ポートランドからのフライトは混み合うだろうが。旅行シーズンには毎度のことだが、それでも家族はどんなときも祝日には集まるべきだ。兄上も、義理の姉上も、それから新しい家族の姪っ子のジュヌヴィエーヴも、きみに会いたがっているだろう。あのかわいい赤ん坊はいつのまにか大きくなってきていることだろうね。叔母さんと会わないうちに。こんなに遠くに引っ越してほんとはよかったのかい？